



女教師たちの童貞いじり

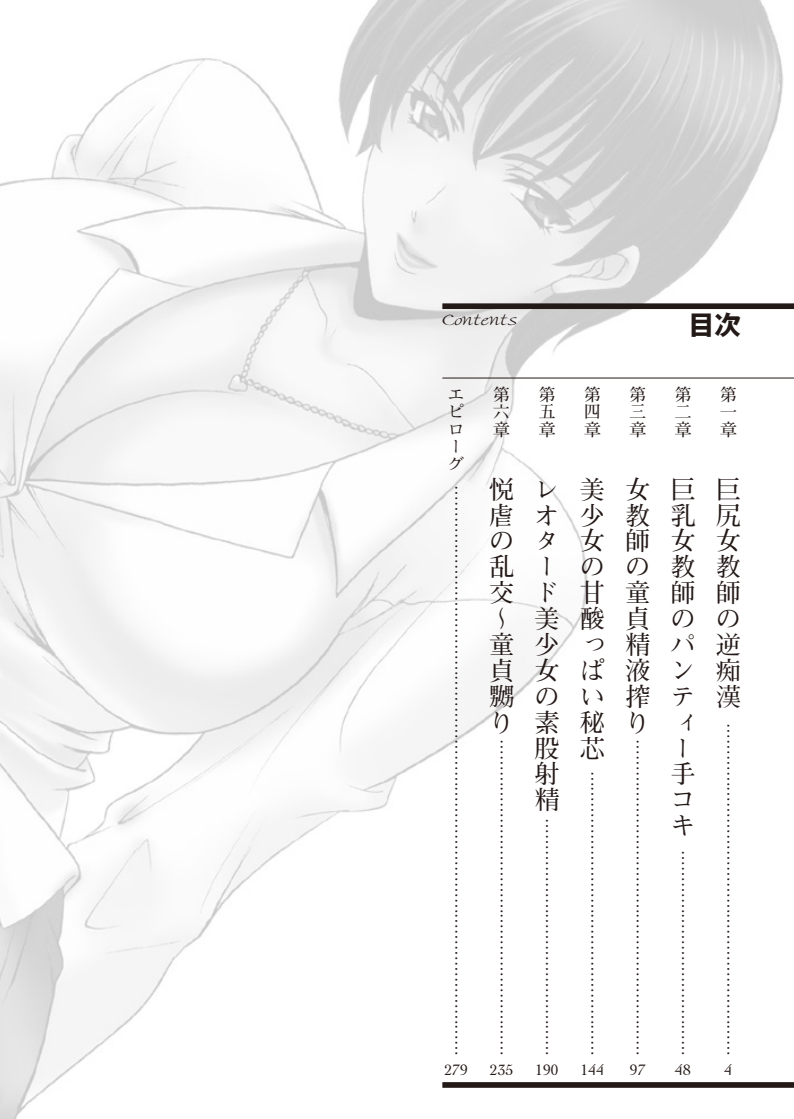
美尻挑発の甘い罠

早瀬真人

挿絵／星野竜一

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION



Contents

目次

第一章	巨尻女教師の逆痴漢	4
第二章	巨乳女教師のパンティー手コキ	48
第三章	女教師の童貞精液搾り	97
第四章	美少女の甘酸っぱい秘芯	144
第五章	レオタード美少女の素股射精	190
第六章	悦虐の乱交〜童貞嬲り	235
エピソード		279

登場人物

Characters

大沢 美帆

(おおさわ みほ)

盟朋（めいほう）学園の英語教諭で、正平のクラスの担任。おっとりとしていて、優しく包容力のあるお姉さんタイプの女性。たわわな豊乳の持ち主。

田所 真奈

(たどころ まな)

盟朋学園の体育教師で、水泳部の顧問。男勝りで快活な性格、生徒に対してあけすけな態度を取ることもしばしば。むっちりしたヒップを誇る、艶めかしいお姉様。

柏木 愛理

(かしわざいり)

盟朋学園でも指折りの美少女で、正平のクラスメート。気位の高い勝ち気な少女で、正平に対しても辛らつな物言いをためらわない。新体操部のホープ。

江本 正平

(えもと しょうへい)

共学化したばかりの盟朋学園に通う、初心でちょっとM気質のある少年。写真部所属。

それは鏡に映っていた二次元の世界ではなく、匂い立つような淫臭混じりの熱気を放ちながら立体的に迫ってくる。

正平は目を皿のようにして、美帆の股間の中心部を凝視した。

「どう？ これがよく見えるでしょ？」

目と鼻の先で確認した花弁は、凄まじい衝撃を正平に与えた。

トイレで覗いたときのイメージは、全体がこんもりと盛り上がり、中央の割れ口はもつと簡潔な縦筋という感じだった。そのためか、その部分の構造が霧に霞んだようにぼんやりしていたが、今ははっきりと見て取れる。

外側に誇らしげに飛び出た二枚の肉の唇は、下方へ向かうに従い、ややうねりながら体内へと巻きこまれている。ぱくつと開かれた内側に見える、コーラルピンクの粘膜が腔壁なのだろうか。

上方に息づく蕾は、すでにポリウムたつぷりに膨れあがり、まるで存在感を誇示するように突き出ていた。

(さつき見たときと全然違うや。なんでこんなに変わっちゃったんだろう)

それは美帆が昂奮していることよって生じる、当たり前前の現象だったのだが、もちろん童貞の正平にはわからない。

陰唇も陰核もすでに充血し、合わせ目は何やら濡れて妖しい光を放っている。

神秘的ともいえる女肉の造作を見るにつけ、正平は胸をざわつかせた。まるで締めつけられるような、鉛を呑みこんだような、何か変な気分になってくる。

そんな正平に、美帆は囁くような声で話しかけた。

「そんなに顔を近づけたら、熱い吐息がかかっちゃうわよ」

女性器の複雑な形状もさることながら、美帆の変わりようも、また正平に大きな衝撃を与えていた。

普段は教育熱心で生徒思い、大人しい性格の教師なのである。

生徒たちからの相談を快く引き受け、優しい声音で説諭してくれる様は、優しいお姉さんのようだった。

それが淫婦のように、教え子に対して自ら足を開き、秘園を見せつけてくるとは。もちろん美帆は二十六歳という、誰の目から見ても、りっぱな大人の女性である。

正平も処女だとは思っていないが、別人のようなあまりの変化に、さすがに驚きの色は隠せなかった。

「女が一番感じるところ、あなたにわかるかしら？」

ちらりと見上げると、美帆は普段と変わらない清楚な顔つきに戻っている。ただ瞳

は濡れ光り、目だけをとろんとさせていた。

「ここをね、こうやって触ると感じるの。あ……ン」

美帆が上部の小さい肉芽に人差し指を当て、小刻みに回転させたかと思うと、苦悶の表情を浮かべる。

媚肉の狭間からとろつとした蜂蜜のような雫が滴り落ち、その光景を見た正平の昂奮は頂点へと導かれた。

（ああ、触りたい。舐めたいよおお）

脳漿が沸騰し、男の本能だけが突っ走る。正平は無意識のうちに舌を突き出し、顔を繊細な襞の折り重なった秘裂へと近づけていった。

粘膜のフリルが誘うように口を開き、恥肉の熱化した媚臭が鼻先にまわりつく。だがあと一センチという付近で、正平の顔はそれ以上前へと進めなくなった。美帆の右手が、額をしっかりと押さえこんでいたのである。

「だめだって言ったでしょ？」

美帆は鼻にかかった甘ったるい声を出すと、そのまま机から下り立ち、正平の身体を無理やり立たせた。

啞然となすがままになっていた正平の股間に、美帆の左手がスッと伸びてくる。そ

の手には、真つ赤なレースのショーツが握られていた。

「あ……あ」

愕然としつつも全身を硬直させながら、視線が自身の股間に釘づけになる。美帆はペニスを縛りつけるようにショーツを何度も巻きつけ、そのまま上からそつと握りこんだ。

「ああああああああ！」

脳みそが吹っ飛んでしまうような快美に、正平は裏返った声を発した。

先ほどまで美帆がじかに穿いていた下着、それが自分のペニスを包みこんでいるのである。昂奮するなというほうが無理な話だった。

生温かい、そして汗と恥ずかしい体液で湿っている感触が、そのまま肉胴に伝わってくる。正平は、目の端に涙を滲ませながら咆哮していた。

「悪い子ね。また約束を破る気？」

「そ……そんな気は」

「あら、また嘘をつくの？」

美帆は眉をキッと吊り上げると、指をゆつくりと上下動させていく。

しつとりとした柔らかい布地が肉胴の表面を何度も往復し、正平は今にも絶息する

ような喘ぎ声を何度も放った。

「そ、そ……あああああああ！」

あまりの喜びで足腰がガクガクと震える。心臓が破裂しそうなほどの鼓動を打つ。美帆は正平の顔に視線を送りながら、徐々に手の動きを速めていった。

幾重にも巻かれた美帆の淫らショーツが、正平の若茎を撈るようにしごきあげる。

ときには手首を返すような捻りを見せ、滑らかな生地の上から親指と人差し指で雁首や亀頭の先端をなぞりあげる。

しかも美帆はまるでキスするかのように顔を近づけ、正平の表情をまじまじと見つめるのである。

(すごい！　すごい！　パンティー越しなのに、なんて気持ちいいんだ!!)

美帆の匂いがたつぷりと染みついた、股布の柔らかいしっとり布地も心地いい感触を与えていたが、レースの細かい凹凸部分がさらに適度な刺激を与えてくる。

快楽と切なさが交錯し、正平の射精曲線は一直線に絶頂へと導かれていった。

「ああ、先生。僕、僕もう……」

「イッチャウの？　いいわよ、我慢しなくて。たつぷり出しなさい。先生が江本君のおチンチンに溜まつてる悪いウミを、全部搾り取ってあげる」



美帆の言葉責めが、淑やかな女教師の口をついて出てくる淫靡なセリフが、頭の中をスパークさせる。

指が凄まじいピストンを見せると、正平は臀部の筋肉を引き攣らせながら、ありったけの精液を噴きあげさせた。

「イクっ、イクっ！ イキますうううううう!!」

「きやつ！」

ほんの三十分ほど前に大量射精したばかりにもかかわらず、濃厚な樹液がダイヤモンド型の割れ口から速射砲のように噴出される。それは美帆の顔の付近まで跳ねあがったかと思うと、緩やかな放物線を描くように宙に舞った。

もちろん淫らな行為による情欲は、一回だけの放出では終わらない。白い尾を引く後続の吐液が、二発、三発と花火のように打ちあげられる。

「すごい。すごいわぁ」

美帆は驚嘆の声を発しながらも、指の律動をまったく止めようとはしなかった。言葉どおり、一滴残らず正平の精液を抜き取るつもりのようなのだ。

真っ赤なショーツには落ちてきた粘っこい樹液がべったりと貼りつき、それは美帆のしなやかな指にまで垂れていた。

ようやく噴出が衰えはじめ、美帆は根元からゆっくりと肉幹を絞りあげる。残滓が尿道口からピュッと跳ねあがった瞬間、正平は頭を朦朧とさせたまま、腰から一気に崩れ落ちていった。

「信じられないわ。いくら若いとはいえ、こんなにたくさん出すなんて」

美帆の言葉が遠くで聞こえる。

正平は目を半開きにさせながら、まるで百メートルを全力疾走したときのような吐息を何度も放っていた。全身に凄まじい力を込めていたせいか、身体のあちこちの筋肉が妙な引き攣りを見せている。

美帆は指に付着していた精液をショーツで拭くと、すぐさま腰を落とし、正平のペニスも清拭していった。

「江本君、大丈夫？」

「は……はい」

まるで天国にでも昇りつめたかのような感覚だった。身体に残る気怠さと甘い余韻がなんとも心地いい。

「立てるかしら？」

「大丈夫です」

美帆の手を借りて身体を起こした正平だったが、まるで雲の上を歩いているかのよう
うに足元がふらついてしまう。

ようやく息が整つてくると、正平は女神を仰ぐような目で美帆を見つめた。

いつの間にか、優しい笑みを湛えた普段の女教師の顔に戻っており、急に羞恥心が
込みあげてくる。

「僕……先生のことか」

好きです、というセリフが喉から出かかった瞬間、美帆はその言葉を遮るように口
を開いた。

「いい？　今回はこれで許してあげるけど、今後嘘をついたり、覗きなんかしたら絶
対にダメよ。それから、女生徒相手に変なマネをすることもね」

美帆は真摯な表情、教師然とした顔つきでたしなめてくる。

先ほど見せた官能的な容貌とはえらい違いだったが、しつかり釘を差したあと、一
転してまたもや柔和な表情を見せた。

「約束できるわね？」

「は、はい」

正平はコクリと頷いたものの、美帆はまだ不安感を抱いているようだ。

「でも、あなたの今日の行動を見てると心配だわ。また変なこと考えるんじゃないかって」

そう言いながら、美帆はやや萎靡しかけたペニスにチラと視線を送った。どうやら彼女は、教え子の絶倫に近い性欲の強さを危惧しているようだ。

もちろん正平自身も、約束を守るなどという自信は始めからない。だが美帆の信頼感は、どうしても勝ち取りたいという思いもある。

正平は好印象を与えようと、あえて自信たっぷりに言い放った。

「大丈夫です。僕、美帆先生の言うことなら、なんでも聞きます」

「信用していいのかしら？」

小首を傾げ、上目遣いで見つめてくる仕草がなんとも愛くるしい。正平は大袈裟にブンブンと何度も首を縦に振った。

「じゃ、一週間射精を我慢できる？ もし我慢できたら信用してあげるし、ご褒美もあげるんだけど」

「え？ ほ、ほんとですか？」

「もちろんよ。私は江本君のように嘘はつかないから」

ご褒美という言葉が、さらなる淫靡な世界へ導く甘い囁きに聞こえてくる。

「でも……あなたには無理かもしれないわね」

「そんなことはありません。絶対に我慢してみせます！」

どうやら美帆は正平の性欲の強さを見るにつけ、一週間の禁欲生活に耐えること自体が不可能だと考えているようだ。こうなったら意地でも挑戦してみたくなる。

美帆は快活に答える正平に微笑を送ると、スカートのポケットから一本のリボンを取り出した。昨日、美帆が新体操部の指導をしていた際、後ろ髪を結んでいたものと同じ、黄色いリボンだ。

怪訝な顔の正平を尻目に、美帆は萎靡したペニスの根元にリボンを絡め、くるくると周回させると、蝶結びでやや緩めに結んだ。

(なんだ?)

美帆は、ぼかーんとする正平に向かって悪戯っぽく笑う。

「一人エッチしたくなったら、これを見て自制しなさい。きつく縛っているわけじゃないから、これなら排泄もできるでしょ？」

(そうか。そういうことか!)

約束事を守るために、小指の根元に糸を巻くという話は聞いたことがあったが、これはそのペニスバージョンである。

正平は、あまりの喜悦で飛びあがりたい気持ちだった。

美帆は約束が守られていたかどうか、当然確認する行為に及ぶはずである。それは取りも直さず、再び彼女との甘美な機会を約束してくれたことになる。

「一週間後に、またいらっしやい。そうね、待ち合わせは教員用の女子更衣室、時間は三時半でどうかしら？ あそこなら誰もやって来る心配はないし。記念館の三階にあるんだけど、場所はわかる？」

「はい、わかります！ 僕、僕、絶対に約束を守ります!!」
意識せずとも、つい甲高い声が出てしまう。

今の正平にとって、盟朋の学園生活はまさにバラ色とも言えるものになったのだが、まさに好事魔多し。

正平の位置から五メートルほど先にある、LL教室に通じる扉。そのドアの隙間から、一人の女生徒が驚愕の眼差しを向けていたのである。

狼狽を見せていた彼女の表情が、徐々に憤怒のそれへと変わっていく。

（なんで！ どうして!?!）

感情を露にしながらも、目を見張るような美少女ぶりは、紛れもなく愛理であった。（許せない！ 私だけの美帆先生が、あんな奴と！）

美帆は優しげな、真奈は妖しげな微笑を浮かべ、正平の前に立ちほだかる。そして二人は、そのままゆっくりと腰を落としていった。

まるで腫れ物にでも触れるかのように、美帆が柔らかい指を肉幹に絡める。

「こんなに大きくしちゃって。辛そう。でも、リボンはまだ外してあげないわよ」
「これも、いいお仕置き代わりになってるんじゃない？ たっぷり苦しまなきゃ、罪を償うことにはならないもの」

美帆の言葉を受けた真奈が、左から指を伸ばしてくる。

次の瞬間、美帆は赤い舌を突き出し、陰囊から亀頭に向かって、ツーツと舐めあげた。

「うっ」

敏感な裏茎に虫が這うような感触を受け、ペニスがビクンとしなりを見せる。今度は真奈が亀頭から雁首をチロチロと舌先で擦り、美帆は陰囊を手のひらで弄んだ。

「ずっしりと重いわ。精液がたっぷりと詰まってそう」

美帆の淫語が狂おしいほどの快美を与え、自然と腰がくねってしまふ。

「あ……あ」

口から小さな喘ぎが出た瞬間、美帆は真上から怒張を一気に呑みこんでいった。

「あああああ！」

唇で肉胴を軽く挟みこみ、唾液をたっぷりとまぶしながら、やや速めのストロークで肉茎をしごいていく。

鼻から抜ける「ん……ん」という甘い吐息とともに、口唇の端からすぐさま唾液が溢れ出し、それは肉胴から陰囊まで滴り落ちていった。

五回ほどの律動で、美帆が口からペニスを抜き取る。

正平がひと息つく隙すら与えないように、今度は真奈が怒張をくわえ込み、二人は交互に淫らなサンドイッチフェラを仕掛けていった。

クチュ、プチュと唾液の跳ねる音が鳴り響き、舌をねっとり肉胴に絡ませたかと思うと、ときにはまるで軟体動物のようにくねくねと蠢かす。

「ん……ぶっ」

「うん……ぐっ」

二人の口からペニスが抜き差しされるたびに、ジュプツと大量の唾液が滴り、正平の怒張はまるでオイルのような照りを見せていた。

（あつ、すごい！　すごいよ!!　おチンチンが……おチンチンが溶けちゃう!!）

鋼のような反りを見せているペニスは、あまりにも張りつめすぎ、かなり刺激に鈍

感な状態になっている。それでも女教師二人から受ける口唇奉仕は、正平に精神レベルからの絶大な淫樂を与えていった。

美帆と真奈が頬を目一杯窄め、ジュポッジュポッと強烈な吸引を見せはじめる。その顔つきの、なんとエロチックなことか。

「あああ、あああ」

大きく開けた口から間断のない喘ぎを洩らしながら、童貞少年の顔はやや天井に向けられ、瞳には涙さえ浮かべていた。腰や膝はガクガクとわななき、もはや立っていないことさえままならない。

正平にとつて、二人の行為は仕置きという枠にはまったく入っていないかった。

確かに、リボンの枷がいまだに根元に疼痛を与えていたが、それ以上に口唇愛撫の快楽のほうが圧倒的に大きい。

正平の視界の片隅に、愛理の姿が映りこんだ。

彼女は目を丸くさせ、両手を口元に当てながら、「えっ？ えっ？」と盛んに小さな驚きの声をあげている。

おそらく彼女の頭の中には、講師室で目にした光景が甦り、そのとき見た美帆の淫らな姿が、今の状況とびつたりと重なっているに違いない。

この異様ともいえる状況に、正平の性感はすでに昇天へと向かいつつあった。

真奈が横から肉竿に舌を絡ませ、美帆が睪丸を口腔に引きこむ。ペニスは二人の唾液を大量に纏わせ、それは半ば白濁化しており、陰囊からつららのように垂れ下がるほど、凄まじい有様だった。

三日の禁欲と激しい淫戯が、猛烈な射精願望を促す。

「も……もう」

臀部を引き攀らせつつ正平が我慢の限界を訴えると、美帆と真奈は肉茎からスツと顔を離れた。

「ああ！」

思わず腰砕けになり、慌てて美帆が手を差し伸べる。

「だめよ。こんなんでイッチャつたら、お仕置きにならないでしょ？」

そう言いながら、美帆は正平の手を引つ張った。ふらふらになりながら更衣室の中央、愛理の目の前の床へと寝かされる。

正平は仰向けになりながら、愛理の表情を盗み見た。

彼女の顔から、すでに狼狽の色は消えかけている。いまだ両手で口を押さえてはいたが、瞳は好奇の色を帯び、頬も心なしか、ほんのりと微かな桃色に染まっている。

愛理の本来の目的は、正平と美帆の仲を引き裂くこと。あわよくば正平を学園から追放し、自分の前から消し去るといふ展開まで思い描いていたのかもしれない。

それがまさか、これほどの痴態を見せつけられることになるとは思ってもいなかっただろう。

すでに愛理は性的昂奮を覚えているのか、盛んに腰をもじもじとさせていた。

「柏木さん、よく見てなさいね」

美帆が足を開き、正平の腰を真正面から跨ぐ。

レオタードのぱっくりと開いた股間から、外側に捲れあがった桜貝のような二枚の花びらが見え、その中心部にはねとついた湿地帯の妖しい光を放つ源泉がしっかりと見て取れた。

がちりとしたヒップが、ゆっくりと徐々に下ろされていく。その光景を、正平はまるでスローモーションを見ているかのように凝視していた。

4

パンパンに膨れあがった肉茎は、隆々と天を突いている。

それはこの世のものとは思えない、自分でも驚愕するほどのグロテスクな様相を呈していた。

何本もの青い血管が、まるで肉胴を縛りつける楔のようにブクツと浮き上がっている。大きなえらを張った冠部、躍動する雄々しい茎根は、男の尊厳を誇示するかのように猛り狂っていた。

それが今、女教師の秘芯の中へ埋没しようとしている。

「ン……ふ。お望みどおり、おチンチン入れてあげるわ」

美帆は、本当にこの巨大な肉塊を受け入れられるのか。そしてこのペニスは大人の女性に、快感を与えることができるのか。

いずれにしても正平にとつては、念願だった童貞喪失の瞬間である。

すでに愛液で濡れそぼっている秘部、二枚の濡れ羽が亀頭をがっちり挟みこむ。

（は、入っちゃう！ おチンチンが、美帆先生のおマ○コの中に入っちゃうう！）

「ああ。やつぱり……きついわ」

やはり窮屈さを感じるのか、美帆は眉間に皺を寄せていたが、やがて腰を小さく回転させはじめた。

ヌルツとした感触とともに、亀頭全体にぞわぞわと小さな虫が這うような快美が走

り抜ける。

「あん。気持ちいい」

美帆は甘ったるい声を放ったものの、正平は齒列をただ噛み締めるばかりだった。先端を刺られているだけで、なぜこれほどの快楽を与えるのか。下手をしたら、この状態のままでも射精してしまいそうだ。

正平が全身の筋肉を硬直させると、えらの張った亀頭は雁首ごと恥肉の狭間に呑みこまれていった。

「んっ……グッ！」

「あ……あああああ〜ん」

正平が小さな呻き声をあげると同時に、美帆の愛らしい口から甘い溜め息が洩れれてくる。

そして膣内に一杯になったペニスの満足感をしばし味わったかと思うと、ゆっくりと腰を動かしはじめた。

結合部からはすでにニチャニチャと淫靡な音が鳴り響き、抽送を繰り返すたびに美帆が尾を引くような喘ぎ声を放つ。

「ああ、固くて大きい！　すごい、すごいわあ！　こんなの初めてよおおおおお！」

美帆は顔をしかめながらも、迫りくる快感を全身で享受しているようだった。

両膝を立て、和式便器に跨る体勢をとりながら、ふくよかなヒップを絶えず蠕動させている。

正平の下半身も、今や巨大な快楽に呑みこまれていた。

まったりとした生温かい肉壁が、縦横無尽にペニスを包みこんでくるのである。それはフェラチオの感覚と似通っていたが、腔壁がうねるように肉胴を揉みあげてくる分、その快感度合いは遥かに大きかった。

（こ、これがセックス!? 熱くてヌメヌメしていてあつたかい！ おチンチンが蕩けそうだよお!!）

あまりの峻烈な快美に、もはや喘ぎ声さえ出てこない。正平は両足を一直線に伸ばし、思わず上半身を海老反らせた。

下からの真奈の股間のどアップが、視界へと飛びこんでくる。普段なら、目を皿のようにして凝視していただろう。だが今の正平に、そんな余裕はいっさいなかった。

下半身に荒れ狂う暴風雨のような情欲に、ただ翻弄されるばかりだったのである。

真奈が紐のように細い水着の底を横にずらし、こちらも豊潤な愛液で濡れそぼった女肉の造作が晒される。

「ふふ。気持ちよさそうな顔して。お口にもたつぷりと味わわせてあげる」

真奈は美帆と向き合って正平の顔を跨ぎ、そのままゆっくりと腰を落としていった。熟れてぱっくりと開いた無花果のような果肉が、徐々に眼前に迫ってくる。粘膜のフリルから匂い立つ微かな淫臭が、鼻先に漂ってくる。

ヌルツとした感触が鼻と唇に触れた瞬間、正平はその媚臭を胸一杯に吸いこんでいた。

「ん……んっ」

はちきれそうな肉感的ヒップが、ゆったりと正平の顔面を押しこんでいく。男の性本能がそうさせたのか、正平が舌を突き出し、舟状の割れ目をなぞりあげると、真奈は上半身をビクンとわななかせた。

「あっ。いい〜ん」

桃の実のような真奈の双臀が、緩やかな前後動をはじめ。意識してクリトリスを正平の鼻と口に当て、自ら快感の度合いを高めているようだ。そのあいだも、美帆はヒップを派手に揺すり、うねる膈壁で剛直を磨きあげている。

まさに前門の虎、後門の狼といった状況に、正平の頭は爆発寸前だった。

ただでさえ、仕置きやダブルフェラと、さんざん激しい刺激を受けてきたのである。

童貞を喪失したばかりの少年に、堪えろというほうが無理な話だった。

愛理は正平の横に佇みながら、もう泣きそうな顔をしていた。

自分だけが、仲間外れにされたような思いでいたのかもしれない。だがその左手はレオタードの上から乳房を揉みしだき、右手は股間を弄り、盛んに腰をくねらせている。

「あなたもこっちにいらっしやい」

美帆の言葉を待っていたのか、愛理はご主人様に仕える召使いのように駆け寄り、正平の身体の真横に膝をついた。

よほど感情が昂っていたのか、そのまま美帆の濡れた唇に自らの唇を押しつけていく。

「あん……先生」

熱い溜め息とともに、舌と舌を絡めるディープキスの唾液音が響いてくる。もちろん顔面騎乗されている正平からは見えなかったが、その光景ははつきりと臉の裏に浮かんでいた。

「あら？ あなたも濡れちゃってるのね。もつと足を広げてよく見せてごらんなさい。あらあら、すごいわ。こんなに大きなシミを作っちゃって」



「は……恥ずかしいです！」

美帆が乙女の縦筋を指でなぞっているのか、湿った衣擦れの音が聞こえてきたかと思うと、愛理がけたたましい嬌声をあげる。

「あっ……んううううう！」

見えない分、想像力が刺激され、正平は真奈のヒップの下で何度も呻いた。

「かわいいわ。先生、柏木さんのこと大好きよ」

「ああ、うれしいです！」

「あとでたっぷりとかわいがつてあげるから、ちょっと待っててね。先にお仕置きを済ませちゃうから」

愛理にそう告げると、美帆は本格的に腰を動かしはじめた。それと同時に、真奈のヒップの動きも激しさを増していく。

「ああ、いきそう。いきそうだわ！」

前後のスライドとともに、まろやかな肉の球体が円を描くような動きを見せてくる。正平の鼻と口は愛液で濡れ光り、ヌチャヌチャと淫らかな音を立てていた。

「あん、いい！ おマ○コいい！ こっちもいきそう！」

美帆が恥骨を打ちつけ、まるでトランポリンをしているような凄まじい律動を見せ

る。バツンバツンとヒップが太股を打ち鳴らすたびに、根元に激痛が走ったが、正平は歯を喰い縛って耐えた。

最高のタイミングで射精したい。三日間の溜まった精液をたっぷり放出したい。

その思いでひたすら自制したのだが、美帆と真奈の動きがさらなる加速を見せると、正平は巨尻の下から雄叫びをあげた。

「グッ！ グムウウウウ!!」

「あつ、ふう……ン。江本君、イクみたい」

「イキたいの？ いいのよお、我慢しないでイッても」

真奈が腰をくねらせながら甘ったるい声を発し、美帆がようやくやく射精許可のセリフを口にする。二人の律動は休むことなく、まるで正平を一時でも早く放出に導くかのように腰を振り回した。

ピンク色の霧が脳裏に立ちこめ、白い火花が脳内スクリーンに何度も打ちあげられる。

正平は下半身の呪縛を解き放つように、自ら全身に力を込めた。

「イグッ！ イグウウウウウウウ!!」

青白い稲光が全身を貫き、まさに抜群のタイミングで射精するはずだった。

だが睾丸に蓄積されていた精液が射出した瞬間、それはリボンの枷に塞ぎ止められ、再び陰嚢に向かって逆流していた。

「あ……んぐっ！」

絶頂変じて、狂おしい切なげな感情が全身を苛んでいく。それは、身を八つ裂きにされるような苦しみに近いものだった。

「はああああん！ 気持ちいいわああ」

軽いアクメに達したのか、真奈がようやくヒップを浮かし、身体を横に移動させる。その直後、正平は汗と愛液で顔面中を濡らしながら、苦悶の表情で身体をくねらせた。「バカね。こんなに固く結んだら、射精できるわけじゃないじゃない。どう？ 柏木さん。いいお仕置きになってると思わない？」

愛理は呆然とした顔のまま、涙目の正平に視線を向ける。

自ら正平のペニスを拘束した愛理だったが、このようなかたちで仕置きに使われるとは思っていないかったのか、啞然としながらもコクリと頷いた。

「ああ。こつちもいきそうだわ」

美帆は凄まじいヒップのスライドを見せ、徐々に絹を引き裂くような悲鳴をあげていった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

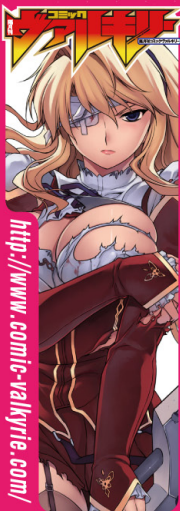
©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!